



だろうか。そう思うほど、よく吟味され、よく練られた内容でした。平成八年に、この取り組みで県社協が保健文化賞を受けることができ、次年度には、精神保健ボランティア連絡協議会が受賞できたのもうれいことでした。

県社協は、ものすごくエネルギーを持っている人たちの集まる場です。そこで学んで脱皮して、それぞれがまた地域に持ち帰る。長年にわたり共同募金をいただいたので、実によく記録に残っています。

和田 在宅福祉が未整備な時代に、福祉機器展や住宅改修相談の地域展開を行ったことが、県社協との協働の始まりでした。また、重度障害者から「絵を描きたい」と希望があり、県社協に相談して自助具をつくり、ご本人が充実した生活を過ごされたことは、今も心に残っています。これをきっかけに、きめ細かな個別支援の必要性が理解され、県社協

の専門性が地域に還元され、人材育成にもつながったことは大変ありがたかったです。

最近では、地域包括支援センターや法人後見事業に取り組み、いかに権利侵害が多く発生しているか、改めて気づきました。関係者も、これではいけないと思っているのですが、しくみに変えるエネルギーをなかなか持てない。そこで県社協の情報量と専門性を借りて検討会を開催し、報告書をまとめました。

取り組みの中で、地域の関係者の意識が非常に高いことを実感しています。その思いをつなぎ、しくみにすることが社協の役割ではないでしょうか。県社協には、地域のニーズや時代の変化に合わせた市町村社協の取り組みを、専門性の視点から支えてほしいです。

三澤 平成三年頃、施設建設費の借り入れの相談に来たのが、県社協との関わりの始まりでした。その後、情報交換や研究発表を始めようと、「かながわ高齢者福祉研究大会」の第一回実行委員長として深く関わりました。初めは発表者を集めるのにも大変で、大会前夜まで話し合いながら当日を迎えた思い出があります。学生を無料参加にして就職につながるようとか、介護福祉士養成校に企画から参加いただいたり、企業の協賛も入るなど、

参加者はあつという間に伸びていきました。今年度の十回目から、介護技術の発表を取り入れたところ、大変よい成果が上げられ、次回も応募が多いと思います。

高齢者福祉施設間の連携や、支援の質の向上、介護福祉士や介護職の定着をどのように進めていくのかという課題について、経営者部会として人材の確保・定着の委員長も担っています。今後、介護の職場がさらに増えていく中で、介護職のあるべき姿の道筋をつけていかなない限り、介護職が定着していかないのではと考えているところです。

地域では今、何が起きているのか？

鈴木 制度が変わっていくスピードが速すぎるというのが実感です。明日が見えない、先が見えないことが、不安を与えるものと思います。地域が自分なりの生活ができる場になっているか、本当にそこで個々人のニーズが果たされるのかなと不安に思うのです。たとえば、病院や施設ではお風呂に昼間入るけれど、今、在宅でも昼間に入るサービスになっている。本当にそれでいいのか。病院や施設で当たり前にやっていたことが、そのまま地域で行われていないか。地域のグループホームなどができても、規模が小さく

専門性とネットワークの面から市町村社協を支えてほしい (和田氏)
 社会福祉法人が、介護職のあるべき道筋をつけていかななくては (三澤氏)